

中学校 教育相談

中学校における不登校の早期対応に関する研究
—学校と家庭における不登校に関する認知の実態調査を通して—

教育相談課 研究員 松代直人

要 旨

中学校の不登校における実態及び意識について、生徒・保護者・教師を対象に調査検討した。不登校への早期対応における質問項目を統計処理した結果、三者間に認知差があった。このことから、不登校における早期対応には学習支援、組織的対応、関係機関等との連携、学校とのつながりを形成・維持するかかわり、能動的・肯定的かかわり、適正な保護者対応が必要であることなどが示唆された。

キーワード：中学校 生徒・保護者・教師 不登校実態及び意識 認知差 早期対応

I 主題設定の理由

文部科学省は、平成20年度の『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（以下『問題行動調査』とする）において、中学校の不登校生徒数が104,153人と発表している。前年度比で-1,175人となっているが、平成10年度に10万人を超えてからはほぼ横ばい状態が続いており、依然として不登校は大きな教育問題となっている。

不登校の詳細な状況について学校からの報告を見ると、中学校の「不登校となったきっかけと考えられる状況」では、「その他本人に関わる問題（極度の不安や緊張、無気力等で他に特に直接のきっかけとなるような事柄が見あたらないもの）」が41.0%で最も多く、次いで「いじめを除く友人関係をめぐる問題（けんか等）」が19.9%、「学業の不振」が10.9%の順になっている。

一方、現代教育研究会が文部科学省の委託を受けて行った『不登校に関する実態調査』（森田，2001）では、中学校3年次の不登校経験者を対象に、不登校当時の状況などについて調査している。そのうち、「学校を休みはじめた直接のきっかけ」では、「友人関係をめぐる問題」が44.5%で最も多く、次いで「学業の不振」が27.6%、「教師との関係をめぐる問題」が20.8%の順になっている。

この2つの調査は、回答方法などに相違があるため単純な比較はできないが、特に「教師との関係をめぐる問題」に注目すると、『問題行動調査』では1.5%、『不登校に関する実態調査』では20.8%となっている。これらのことから「不登校になったきっかけ」をはじめとした不登校に関する認知において、生徒と教師間では大きな差が見られた。したがって、その対応にもズレが生じ、教師の思い込みによる一方的な対応が行われていることが推測される。特に学校復帰においては、この対応について生徒と教師双方の認知に差が生じないようにすることが重要であることは言うまでもない。

このことを別の角度から考察すると、認知差は生徒のみならず、その子どもを支える保護者との間にも見られるのでは、とも推測される。

佐藤（2005）は「教育・心理的支援では、子ども、家庭、そして学校のトライアングル関係の中で登校拒否^(注)をとらえる必要がある。どちらかに偏ったものであってはならない。この視点は登校拒否の成り立ちを考える場合も、その対応をめぐらす時も、必要である。学校復帰は担任を中心とした学校側の、児童・生徒を巻き込んだ協力がないと実現しない」と述べている。

そこで、生徒、保護者、教師に対して不登校に関する調査を行い、それらの認知差に基づいてどのような部分についての早期対応が必要なのかを明らかにすることを目的とし、主題を設定した。

II 研究目標

中学校の不登校において、生徒の不登校に関する認知を詳細に把握するために、学校と家庭に対して実態

調査をし、その差異に基づいてどのような部分についての早期対応が必要なのかを明らかにする。

Ⅲ 研究仮説

中学校の不登校において、以下の2点に着眼した実態調査を生徒・保護者・教師に対して行うことで、不登校生徒に対する的確な対応を明らかにすることができるであろう。

- (1) 不登校に関する4つの観点（①情緒の安定、②自己主張力、③生活態度、④学校へのニーズ）に基づいた認知の調査。
- (2) 不登校への早期対応に関する認知差の把握。

Ⅳ 研究の実際とその考察

1 不登校状態をとらえる観点

不登校生徒への指導援助の難しさは、個々の生徒によって状態も効果のある方法も様々ではないという点にある。したがって、このような様々な生徒の状態を多面的に理解し、多様な指導援助方法を準備する必要があり、埼玉県立総合教育センター（2004）では、児童生徒の不登校状態を理解するためには、次の3つの観点が役立つとしている。

- ・ 情緒の安定
不安や否定的な感情が見られるか否かという傾向を見極める観点。不安や抑うつ的な気持ちは、ときに攻撃的な表現や、人目を気にするなどの形で表れる。
- ・ 自己主張力
思いや考え、不満などを表現できるか否かという傾向を見極める観点。物怖じせずにものをはっきり言う、また、逆に何も話してくれないなどの形で表れる。
- ・ 生活態度
几帳面でまじめすぎる頑なな傾向と生活の乱れと対極について見極める観点。前者は融通の利かない緊張として、後者は例えば非行化などの形で表れる。

これらは、心理臨床の立場からは別の観点があるのかもしれないが、学校の教師が指導援助方法を選択する上で求められる、生徒を理解するための観点である、としている。

次に、指導援助方法について、佐藤（2005）は「どんなに背景が違って、不登校状態にある子どもにはほとんど例外なく、学校や教師への不信、敵意、不安、恐怖などがある。いつでも教師は子どもの気持ちや心の痛みを知り、子どもの立場に立って理解し、それを共有していくことが大切である。さらに、これらの営みを根底に、いま子どもが自発的にしようとしていることを尊重する—能動的・肯定的—かかわりが必要となる」と述べている。教師の思い込みによる指導援助の強制は、生徒のみならず、保護者との関係を悪化させることは言うまでもない。そこで、生徒・保護者が学校に望む支援も、不登校生徒の状態を理解する重要な観点であると考えた。

したがって、①情緒の安定、②自己主張力、③生活態度を、不登校の状態をとらえる観点とした。また、それらにあわせて④不登校対応（学校へのニーズ）も加えた。

2 調査について

(1) 調査対象について

青森県内の中学生が約42,000名、教員が約3,000名であることから、統計上必要なサンプル数を算出した結果、生徒・保護者が各380名、教員が340名となった。したがって、回収率等を考慮し、調査対象は生徒・保護者は1,031名(6校)、教員は506名(14校)とし、県内の地域に偏りがないように配慮した上で、無作為に学校を定めた。そのうち生徒は850名(回収率82.4%)、保護者は741名(回収率71.9%)、教員は325名(回収率64.2%)から回答を得た。なお有効回答数は生徒が832、保護者が739、教員が323であった。

(2) 調査時期について

平成22年9月15日～10月15日にかけて実施した。

3 質問項目について

埼玉県立総合教育センター（2004）の「不登校に関する調査研究」をもとに、「不登校状態測定尺度」と

不登校に対する「指導援助のカテゴリーとその内容」を参考に作成した(表1)。

(1) 生徒・保護者に対する質問紙について

中学生の不登校状態を測るために、「不登校状態測定尺度(24項目)」を対象者が理解しやすいような語彙に変換して作成した。また、学校に望む不登校対応を測るために、それについての質問紙(11項目)を作成した。いずれも、尺度は5件法(「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」とした)。

なお質問紙において、生徒用の主語は「あなた」、保護者用の主語は「お子様」として各々作成している。

(2) 教師に対する質問紙について

教師による不登校対応を測るために、「不登校状態測定尺度」の質問項目(24項目)にあてはまる生徒への対応のうち、特に重要と思われるものを二つ選択させる質問紙を作成した。

表1 生徒・保護者・教師用質問項目一覧(不登校状態観点別)

	教師用質問項目	生徒用質問項目	保護者用質問項目
① 情緒 の安定	わがままを通そうとする	わがままを通そうとする	わがままを通そうとする
	感情の起伏が激しい	すぐに怒ったり、泣いたりする	感情の起伏が激しい
	些細なことを気にする	細かいことが気になる	些細なことを気にする
	他者に厳しい	他人に厳しい	他者に厳しい
	1つのことにこだわりすぎる	1つのことにこだわりすぎる	1つのことにこだわりすぎる
	自分の思い通りでないと感じ込む	自分の思い通りでないと感じ込む	自分の思い通りでないと感じ込む
	他者の目を気にする	他人の目を気にする	他人の目を気にする
	ものごとを悪い方に考える	ものごとを悪い方に考える	ものごとを悪い方に考える
② 自己 主張 力	気持ちを表現しない	気持ちをうまく表現できない	気持ちを表現できない
	おどおどしている	周りを恐れている	おどおどしている
	交友の範囲が狭い	友人が少ない	交友範囲が狭い
	自己主張ができない	自己主張が苦手である	自己主張ができない
	引っ込み思案である	引っ込み思案である	引っ込み思案である
	自分の考えをうまく表現できない	自分の考えをうまく表現できない	自分の考えをうまく表現できない
	人付き合いが不得手だ	人づきあいが不得意だ	人づきあいが不得意だ
	表情が硬い	表情が硬い	表情が硬い
③ 生活 態度	生活のリズムが不規則である	生活のリズムが不規則である	生活のリズムが不規則である
	あきらめが早い	あきらめが早い	あきらめが早い
	嘘をつく	つい嘘をついてしまう	嘘をつく
	～しなければという思い込みが強い	～しなければという思い込みが強い	～しなければという思い込みが強い
	ルール違反が見られる	ルールを守れないことがある	ルール違反が見られる
	非行傾向がある	問題行動をすることがある	非行傾向がある
	規範意識が低い	社会のルールを守る意識が低い	規範意識が低い
	基本的な生活習慣が身につけていない	正しい生活習慣が身につけていない	正しい生活習慣が身につけていない
④ 不登校 対応	学校と児童生徒や家庭とのつながりを大切にする	学校(担任やクラスメートなど)ともっとつながりたい	学校(担任やクラスメートなど)と子どもや家庭のつながりを大切にしてほしい
	校内の援助源に援助を求める	担任以外の先生やスクールカウンセラーなどに支援してほしい	担任以外の先生やスクールカウンセラーなどに援助してほしい
	不登校児童生徒を取り巻く人間関係の調整を行う	人間関係を調整してほしい	子どもを取り巻く人間関係の調整をしてほしい
	登校指導をする	登校をサポートしてほしい	登校指導をしてほしい
	教室とは別の場所の居場所を設ける	教室とは別の場所で活動したい	教室とは別の居場所を設けてほしい
	家族の気持ちを支える	家族の相談に乗ってほしい	家族の気持ちを支えてほしい
	意欲の喚起を図る	やる気を引き出してほしい	子どもの意欲を喚起してほしい
	児童生徒の気持ちを支える	自分の相談に乗ってほしい	子どもの気持ちを支えてほしい
	学習の支援をする	学習をサポートしてほしい	学習の支援をしてほしい
	社会規範について指導する	社会に適した生活を教えてほしい	社会規範について指導してほしい
校外の相談・医療機関と連携を図る	校外の相談・医療機関を紹介してほしい	校外の相談・医療機関を紹介してほしい	

4 結果と考察

「日常生活に関する実態」の質問のうち、「情緒の安定」に関する得点が27点以上の調査対象者を「情緒不安定群」, 「自己主張力」に関する得点が30点以上を「自己主張力不足群」, 「生活態度」に関する得点が21点以上を「緊張感に欠けた生活態度群」とした(埼玉県立総合教育センター, 2004)。

(1) 『登校しない, あるいはしたくともできない状況になったときに, あなたが学校に望むこと』(生徒)の集計結果

ア 「情緒不安定群」の結果(図1)

「学習をサポートしてほしい」の平均値が3.40と最も高く, 次いで「人間関係を調整してほしい」の3.37, 「自分の相談に乗ってほしい」の3.29の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは, 「校外の相談・医療機関を紹介してほしい」で, 2.07であった。

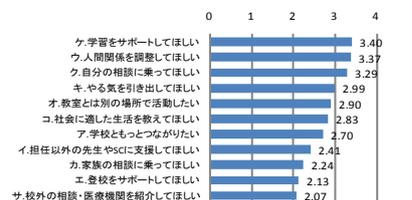


図1 「学校に望むこと」生徒(情緒不安定群)平均

イ 「自己主張力不足群」の結果(図2)

「学習をサポートしてほしい」の平均値が3.54と最も高く, 次いで「人間関係を調整してほしい」の3.42, 「自分の相談に乗ってほしい」の3.11の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは「登校をサポートしてほしい」・「家族の相談に乗ってほしい」・「校外の相談・医療機関を紹介してほしい」の3項目で, いずれも2.23であった。

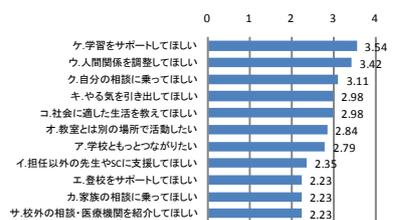


図2 「学校に望むこと」生徒(自己主張力不足群)平均

ウ 「緊張感に欠けた生活態度群」の結果(図3)

「学習をサポートしてほしい」の平均値が3.24と最も高く, 次いで「やる気を引き出してほしい」の2.84, 「人間関係を調整してほしい」の2.83の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは「校外の相談・医療機関を紹介してほしい」で, 2.01であった。



図3 「学校に望むこと」生徒(緊張感に欠けた生活態度群)平均

(2) 『登校しない, あるいはしたくともできない状況になったときに, あなたが学校に望むこと』(保護者)の集計結果

ア 「情緒不安定群」の結果(図4)

「子どもの気持ちを支えてほしい」の平均値が4.16と最も高く, 次いで「学校と子どもや家庭とのつながりを大切にしてほしい」の4.14, 「学習の支援をしてほしい」の4.11の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは「登校指導をしてほしい」で, 3.09であった。



図4 「学校に望むこと」保護者(情緒不安定群)平均

イ 「自己主張力不足群」の結果(図5)

「子どもの気持ちを支えてほしい」の平均値が4.43と最も高く, 次いで「学校と子どもや家庭とのつながりを大切にしてほしい」の4.23, 「学習の支援をしてほしい」の4.17の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは「登校指導をしてほしい」で3.13であった。

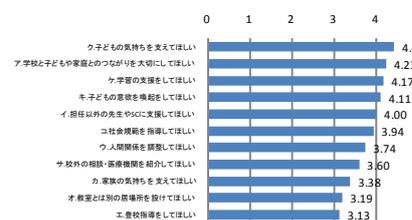


図5 「学校に望むこと」保護者(自己主張力不足群)平均

ウ 「緊張感に欠けた生活態度群」の結果(図6)

「子どもの気持ちを支えてほしい」の平均値が4.13と最も高く, 次いで「学校と子どもや家庭とのつながりを大切にしてほしい」の4.08, 「学習の支援をしてほしい」の4.03の順となった。

一方, 平均値が最も低かったのは「登校指導をしてほしい」で3.11であった。

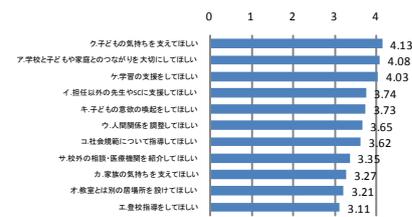


図6 「学校に望むこと」保護者(緊張感に欠けた生活態度群)平均

(3) 『不登校・不登校傾向生徒へのサポートのうち, 特に重要だと思われるもの』(教師)の集計結果

教師による各群の生徒への不登校対応で重要だと思う人数の割合(2項目を選択しているため, その合

計は200%となる)を示した。

ア 「情緒不安定群」の結果(図7)

「生徒の気持ちを支える」の割合が、71.4%と最も多く、次いで「不登校生徒を取り巻く人間関係の調整」の30.5%、「校内の援助源に援助を求める」の18.2%の順となった。

一方、最も少なかったのは「学習の支援をする」で、0.9%であった。

イ 「自己主張力不足群」の結果(図8)

「生徒の気持ちを支える」の割合が、68.6%と最も多く、次いで「不登校生徒を取り巻く人間関係の調整」の50.1%、「学校と生徒や家庭とのつながりを大切にする」の19.1%の順となった。

一方、最も少なかったのは「社会規範について指導する」・「登校指導をする」の2項目で、いずれも1.2%であった。

ウ 「緊張感に欠けた生活態度群」の結果(図9)

「社会規範について指導する」の割合が52.2%と最も多く、次いで「生徒の気持ちを支える」の49.2%、「家族の気持ちを支える」の18.0%の順となった。

一方、最も少なかったのは「教室とは別の居場所を設ける」で、1.9%であった。

(4) 考察

ア 不登校対応における、学校と家庭の認知差について

教師への調査は、より詳細な検証を行うために、生徒・保護者のデータと水準が異なったものを用いた。そのため比較の参考とするために、生徒・保護者対象の調査結果のうち、『学校に望むこと』の11項目ごとに「4」(ややあてはまる)と「5」(とてもあてはまる)の評価をした人数を集計した。

① 「情緒不安定群」及び「自己主張力不足群」に関する不登校対応(図10~13)

両群の三者の結果において、重要と思われる不登校対応について、ほぼ同様の傾向が見られた。特に保護者と教師については、その傾向が強く見られた。このことは、保護者・教師における、両群の不登校生徒について、認知傾向が同様であることを示唆している。

具体的に見ると、大きく異なった傾向が現れたのは「学習の支援」であった。特に生徒では最も高いのに対して、教師においてはほとんど重要と思われていない傾向が見られた。このことから、教師による不登校対応の現状において、学習支援が課題の一つであることが示唆された。森田(2003)は「授業の有用感は、登校回避感情と強い相関を示している」と述べ、さらに、「すべての学校生活にわたって児童・生徒がかかわるあらゆる学習過程をそれぞれの将来と結びつけ、自分の人生の一環として位置づけさせる指導をも含むものとして、取り組んでいくことが必要である」とも述べている。したがって、学習支援の在り方は、生徒の状態に合わせて、慎重に検討されなければならない。

次に異なったものは、「校内の援助源」であった。生徒においては、中程度の重要視傾向が見られたが、教師と保護者においては、重要と思われている傾向が見られた。このことは、保護者・教師において、対応を自身以外に求めている傾向を示唆している。情緒が不安定な子どもの特性と併せ、これらのことから、両者はこの群の子ども・生徒へのかかわり方に不安を抱えていることが推測される。したがってこの群の不登校対応について、思春期特有の心理状態などを十分考慮し、生徒理解に努めるとともに、組織的な対応と関係機関等との連携の整備も必要ではないだろうか。このことについて、文部科学省『生徒指導提要』(2010)においても、「複雑化・多様化する児童生徒の問題行動等を解決するためには、学級担任・ホームルーム担任が一人で問題を抱え込むのではなく、管理職、生徒指導担当、教育相談担当、学年主任、養護教諭など校内の教職員や、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの外部の専門家等を活用して学校として組織的に対応することが重要」としている。

他に異なったものは、「学校とのつながり」であった。教師と保護者においては、同様に重要と思われている傾向が見られたが、生徒においては、中程度の重要視傾向が見られた。このことは、自己主張力が不足している生徒において、「学校とのつながり」についてあまり必要性を感じていないことが推測される。津川・寺田(2010)は、「学校生活のなかに何らかの価値や楽しみを見出し、何かを支えに

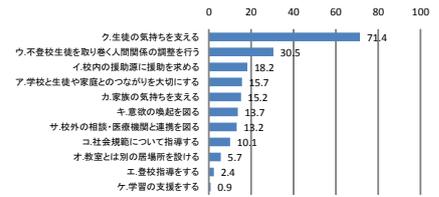


図7 教師による「不登校・不登校傾向生徒(情緒不安定群)」へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (% n=323×2×8)

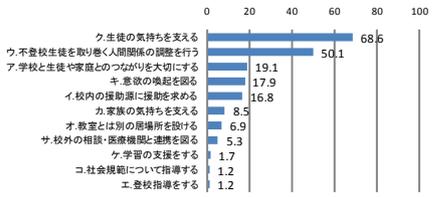


図8 教師による「不登校・不登校傾向生徒(自己主張力不足群)」へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (% n=323×2×8)

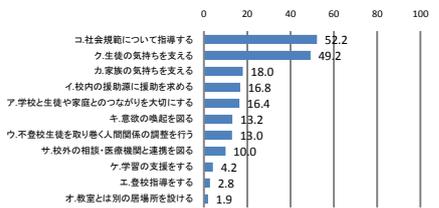


図9 教師による「不登校・不登校傾向生徒(緊張感に欠けた生活態度群)」へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (% n=323×2×8)

して登校行動が保たれていると理解できる。そのような価値や支えというものは、換言すれば、学校との結びつきに他ならない。したがって、生徒が何によって学校と結びついているかを明らかにし、それを維持して広げることによって、登校行動はより確かなものになることが予想できる」と述べている。したがって、この群の不登校対応において、学校とのつながりを形成することを目的としたかわりも重要である。

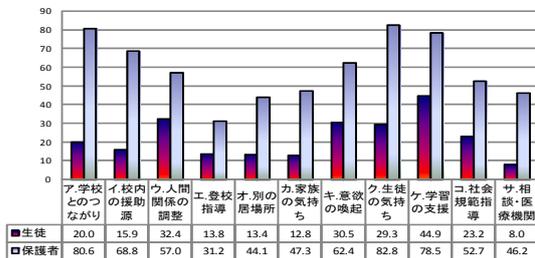


図10 生徒と保護者(情緒不安定群)による「不登校対応」の上位評価選択人数の割合 (% 生徒n=134 保護者n=93)

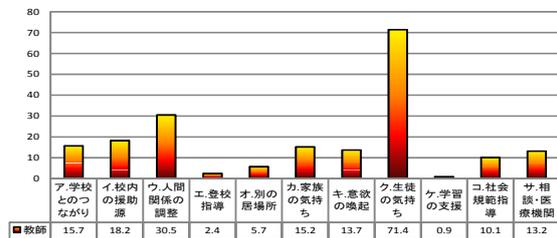


図11 教師による不登校・不登校傾向生徒(情緒不安定群)へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (%n=323×2×8)

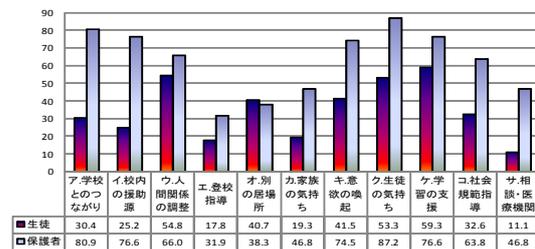


図12 生徒と保護者(自己主張力不足群)による「不登校対応」の上位評価選択人数の割合 (% 生徒n=57 保護者n=47)

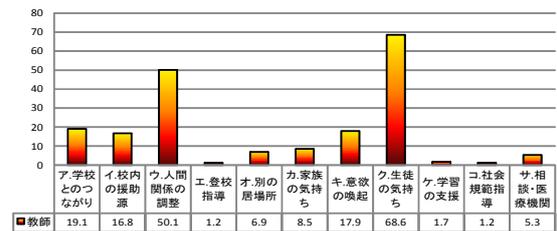


図13 教師による不登校・不登校傾向生徒(自己主張力不足群)へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (%n=323×2×8)

② 「緊張感に欠けた生活態度群」に関する不登校対応 (図14~15)

まず、「学習の支援」について、情緒不安定群・自己主張力不足群と同様の傾向が見られた。

他に異なったものは、「社会規範の指導」であった。生徒・保護者においては、中程度の重要視傾向が見られたが、教師において、とても重要と思われる傾向が見られた。先述のとおり、教師は子どもの気持ちや心の痛みを知り、子どもの立場に立って理解し、それを共有していくことが大切である。さらに、これらの営みを根底に、いま子どもが自発的にしようとしていることを尊重する一能動的・肯定的一かわりが、この群の不登校対応に必要であると言える。

さらに、「人間関係の調整」についても、保護者・教師においては、中程度の重要視傾向が見られたが、生徒において、とても重要と思われる傾向が見られた。これは生徒が、学校生活において人間関係のストレスを感じていることが多いとともに、教師による保護者対応の現状において、具体的かつ客観的な情報提供が不足していることも示唆している。佐藤(2005)は、保護者について、「学校欠席は子どもの成績や将来にも支障になるので、親は拒む理由を明らかにし、早く取り除こうとする」と述べている。これらのことから、この群の不登校対応には、教師による信頼関係の形成や傾聴の姿勢を重視した適正な保護者対応も必要であることが理解できる。

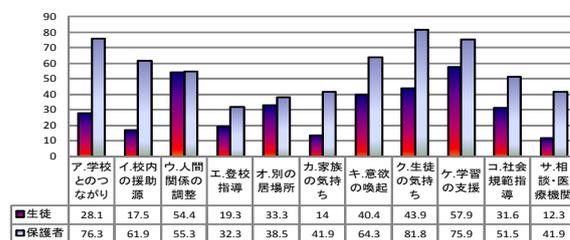


図14 生徒と保護者(緊張感に欠けた生活態度群)による「不登校対応」の上位評価選択人数の割合 (% 生徒n=431 保護者n=291)

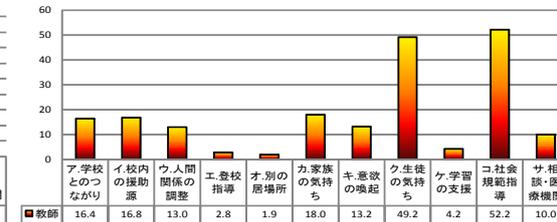


図15 教師による不登校・不登校傾向生徒(緊張感に欠けた生活態度群)へのサポートのうち特に重要だと思われるもの (%n=323×2×8)

イ 不登校対応における、生徒と保護者の認知差について

生徒と保護者の平均値に有意差があるかどうかを検討するため、統計処理(t検定)を行った。なお、欠損値があるデータはリストごとに除外した。

① 「情緒不安定群」および「自己主張力不足群」に関する不登校対応(表2)

両群の結果において、生徒・保護者による各不登校対応への評価は、ほぼ同様の傾向が見られた。

まず、統計処理の結果は、「人間関係を調整してほしい」と「教室とは別の場所で活動したい」の2項目を除いて、保護者の平均値が生徒より高く、有意差が認められた。2項目が有意差がないことにつ

いては、平均値が両者同水準であったことによるものと思われる。このことから、保護者が生徒以上に学校による不登校対応へ期待を寄せていることが示唆された。

次に、平均値が大きく異なる項目は「学校とのつながり」で生徒は保護者よりかなり低かった。このことから、保護者においても、学校とのつながりを形成することを目的としたかわりが重要であることが言える。

また、「担任以外の先生やSCに支援してほしい」も、生徒は保護者よりかなり低かった。このことから、保護者においても子どもの理解に努めるとともに、学校においては組織的な対応と関係機関等との連携の整備が必要であることが言える。

② 「緊張感に欠けた生活態度群」に関する不登校対応(表3)

11項目すべてにおいて保護者の平均値が生徒より高く、有意差が認められた。このことから「緊張感に欠けた生活態度群」においても、保護者が生徒以上に学校による不登校への対応に期待を寄せていることが考えられる。

次に、平均値が大きく異なる項目は「学校ともっとつながりたい」、「担任以外の先生やSCに支援してほしい」で、生徒が保護者よりもかなり低かった。このことは、①で述べたことと同様である。

表2 「学校に望むこと」の平均・t検定の結果(情緒不安定群・自己主張力不足群)

質問	保護者 (n=29)		生徒 (n=34)		P(t<α)両側
	M	(SD)	M	(SD)	
	情緒不安定群				
自己主張力不足群					
ア 学校ともっとつながりたい	4.14	(0.95)	2.70	(1.44)	0.00 **
イ 担任以外の先生やSCに支援してほしい	4.23	(1.02)	2.79	(1.31)	0.00 **
ウ 人間関係を調節してほしい	3.84	(0.98)	2.41	(1.41)	0.00 **
エ 登校をサポートしてほしい	3.65	(1.03)	3.37	(1.53)	0.11
オ 教室とは別の場所で活動したい	3.74	(1.25)	3.42	(1.31)	0.21
カ 教室とは別の場所で活動したい	3.19	(1.31)	2.90	(1.56)	0.12
キ やる気を引き出してほしい	3.31	(1.12)	2.24	(1.36)	0.00 **
ク 自分の相談に乗ってほしい	3.38	(1.12)	2.23	(1.15)	0.00 **
ケ 学習をサポートしてほしい	3.69	(0.90)	2.99	(1.51)	0.00 **
コ 社会に適した生活を教えてほしい	4.11	(0.83)	2.98	(1.37)	0.00 **
サ 校外の相談・医療機関を紹介してほしい	4.16	(0.93)	3.29	(1.57)	0.00 **
ソ 学習をサポートしてほしい	4.43	(0.82)	3.11	(1.48)	0.00 **
タ 社会に適した生活を教えてほしい	4.11	(0.93)	3.40	(1.49)	0.00 **
チ 学習をサポートしてほしい	4.17	(1.10)	3.54	(1.24)	0.01 **
リ 社会に適した生活を教えてほしい	3.65	(0.95)	2.83	(1.35)	0.00 **
ル 校外の相談・医療機関を紹介してほしい	3.94	(0.93)	2.98	(1.29)	0.00 **
ロ 社会に適した生活を教えてほしい	3.43	(1.11)	2.07	(1.22)	0.00 **
レ 校外の相談・医療機関を紹介してほしい	3.60	(1.16)	2.23	(1.23)	0.00 **

** p<0.01

表3 「学校に望むこと」の平均・t検定の結果(緊張感に欠けた生活態度群)

質問	保護者 (n=29)		生徒 (n=31)		P(t<α)両側
	M	(SD)	M	(SD)	
	情緒不安定群				
自己主張力不足群					
ア 学校ともっとつながりたい	4.08	(0.95)	2.48	(1.21)	0.00 **
イ 担任以外の先生やSCに支援してほしい	3.74	(1.00)	2.26	(1.16)	0.00 **
ウ 人間関係を調節してほしい	3.65	(1.08)	2.83	(1.36)	0.00 **
エ 登校をサポートしてほしい	3.11	(1.06)	2.07	(1.19)	0.00 **
オ 教室とは別の場所で活動したい	3.21	(1.09)	2.53	(1.42)	0.00 **
カ 教室とは別の場所で活動したい	3.27	(1.05)	2.10	(1.23)	0.00 **
キ やる気を引き出してほしい	3.73	(0.91)	2.84	(1.40)	0.00 **
ク 自分の相談に乗ってほしい	4.13	(0.83)	2.78	(1.44)	0.00 **
ケ 学習をサポートしてほしい	4.03	(0.93)	3.24	(1.39)	0.00 **
コ 社会に適した生活を教えてほしい	3.62	(0.91)	2.65	(1.25)	0.00 **
サ 校外の相談・医療機関を紹介してほしい	3.35	(0.98)	2.01	(1.13)	0.00 **

** p<0.01

V 研究のまとめ

中学校の不登校において、学校と家庭間には認知差が見られた。その差異から考察された不登校対応は、次の通りである。

1 生徒への対応

生徒・保護者のニーズから、学習の支援が効果的である。ただし、その在り方は、生徒の状態に合わせて慎重に検討されなければならない。以下は、状態別に見た不登校生徒への留意事項である。

- (1) 情緒が不安定な不登校生徒、及び自己主張ができない不登校生徒に対しては、情緒が不安定となりやすい思春期の特性などを十分考慮し、生徒理解に努めるとともに、組織的な対応と関係機関等との連携の整備が必要である。
- (2) 情緒が不安定な不登校生徒、及び自己主張ができない不登校生徒に対しては、学校とのつながりを形成することを目的としたかわりが必要である。
- (3) 生活態度に乱れがある不登校生徒に対しては、生徒が自発的にしようとしていることを尊重する一能動的・肯定的一かわりが必要である。

2 保護者への対応

不登校において、保護者が生徒以上に学校による対応に期待を寄せていることから、教師による信頼関係の形成や傾聴の姿勢を重視した適正な保護者対応が必要である。

VI 本研究による課題

1 調査対象について

本研究では、登校行動が保たれている生徒とその保護者に対し、「不登校になったとしたとき、学校に望むこと」について調査を行った。今後さらに、不登校及び不登校傾向の状態にある生徒とその保護者を対象に同様の調査を行うことで、より具体的な不登校対応の在り方が明らかになると思われる。

2 調査内容及び統計処理について

本研究では、調査対象者によってデータの水準が異なった。そのため、生徒及び保護者と教師間においてパラメトリック検定を行えず、統計処理による比較ができなかった。

したがって、今後、より正確な認知差を検証するために、三者間において分散分析による統計処理を行えるよう、調査方法を改善する必要があると感じている。

<注>

佐藤 (2005) は「不登校のうち、心理的あるいは社会的原因によって、学校や登校をめぐる不安、葛藤などをもち、自宅に一時的に退避 (withdrawal) しているものを登校拒否」としている。

<引用文献>

- 佐藤修策 2005 「不登校 (登校拒否) の教育・心理的理解と支援」, p. 2, 76, 233, 247, 248, 北大路書房
現代教育研究会 2001 「不登校に関する調査研究」 『不登校その後』, p. 29, 30, 51, 52, 教育開発研究所
文部科学省 2010 「生徒指導提要」, p. 127, 128, 教育図書
津川秀夫・寺田和永 2010 「中学生版むすびスケールによるアセスメント」, 『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要第7号』, p. 9

<引用URL>

- 文部科学省 2009 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」 1. 小中学校不登校
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001056058> (2010. 9. 27)
埼玉県立総合教育センター 2004 「不登校問題に関する調査研究」, p. 2, 4, 6, 11
http://www.center.spec.ed.jp/d/h16/h16_da03.pdf#search (2010. 5. 18)

<参考文献>

- 石本智一 2009 「笑顔で一步前に～スマイルファクトリーの取り組み～」 『月刊生徒指導11月号』 学事出版
小林正幸 2009 「学校でしかできない不登校支援と未然防止」 東洋館出版社
小林正幸・小野昌彦 2005 「教師のための不登校サポートマニュアル」 明治図書
田中究 2010 「いじめ・不登校・学校」 『心の科学第151号』 日本評論社
花輪敏男 2009 「教師が取り組む不登校」 『月刊生徒指導11月号』 学事出版

<参考URL>

- 佐賀県教育センター 2004 「『不登校』を考える 子どもたちの自立に向けての支援とは？」
http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h16/03hutokou/top/top.htm (2010. 7. 5)
八王子市教育委員会 2008 「八王子市における登校支援ネットワークの構築と個票システムの確立に関する報告書」
http://www.city.hachioji.tokyo.jp/dbps_data/_material_/localhost/toukousiennhoukokusyo.pdf#search (2010. 9. 24)
花輪敏男 1991 「児童生徒の不登校に関する学校の取り組み方や指導援助の進め方についての研究」
http://ci.nii.ac.jp/els/110006249665.pdf?id=ART0008270919&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1285306179&cp= (2010. 5. 18)
文部科学省 1993 「不登校への対応の在り方について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/021.htm (2010. 7. 29)
文部科学省 2003 「不登校の対応について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/futoukou/main.htm (2010. 7. 29)
山本奨 2007 「不登校状態に有効な教師による支援方法」
http://ci.nii.ac.jp/els/110006249665.pdf?id=ART0008270919&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1291783058&cp= (2010. 5. 27)